

阿部憲政氏 株式会社阿部春工場代表取締役／タオルマイスター



阿部憲政氏



阿部憲政氏は、株式会社阿部春工場の代表として、また工場長としておよそ60年もの間タオルをつくりつづけてきた製織技術者である。2012年にタオルマイスターに認定され、現在も現役でタオルをつくりながら、今治タオル工業組合内にある「今治タオル技能士会」の主要メンバーとして後進の指導にあっている。

2000年廃止の「国家技能検定」に代わる制度の創設に尽力し、2011年に厚生労働省認定「四国タオル工業組合社内技能検定（織機調整）」を設置した功績は大きい。今回は業界の発展に欠かせない人物である、阿部氏にフォーカスする。

あべ・のりまさ ☆ 1949年10月、愛媛県越智郡大西町（現・今治市大西町）にて誕生。1956年4月大西町立大井小学校入学。1962年4月大西町立大井中学校へ入学。翌年に他校と統合して大西町立大西中学校になったため1965年3月大西中学校の第2期生として卒業。1965年4月愛媛県立今治工業高等学校紡織科に入学し、本格的にタオル製造について学ぶ。1968年3月同校紡織科を卒業したのち、父親が1968年5月に創業した阿部春タオル工場へ入社し、工場長に就任。製織工程の技術者としてキャリアを積み、1983年国家技能検定（織機調整）1級を取得。その後も数々の表彰を受け、現在は「今治タオル技能士会」の主要メンバーとして後進の育成に力を注いでいる。

1. 幼少青年時代

阿部憲政氏は、1949年10月12日に越智郡大西町（現・今治市大西町）に阿部春男氏とヨシコ氏との間に長男として誕生した。下には7つ年の離れた哲^{さとし}氏がいる。

父親の春男氏は、1918年2月24日に大西町で木挽^{こびき}職人の次男として生まれた。第二次世界大戦で戦況が悪化しつつあった1944年に志願してビルマ戦線に赴き、激戦のなか重傷を負った。胸と膝に銃弾を受けて負傷し、命からがら帰国した。膝に埋め込まれた銃弾は、当時応急処理された手術ではうまく除去できず、破片を残したまま70歳を過ぎてようやくとり除かれた。



父親の阿部春男氏

春男氏は、戦後、しばらく役場で配給の仕事に就いたが、モノづくりが好きだったため、今治市でタオルをつくっていた大沢タオルに入社し、その後（株）桃太郎浴巾で男工として整経や製織、織機調整などの技術を学んだ。そして、産地では大手のタオルメーカーだった宮崎タオル（株）（宮崎タオルについては「タオルびと」2015年1月号・2月号、2019年12月号を参照）に移り、タオルづくりに従事しながら、宮崎タオルが当時力を入れていた「ジャカブリ」と呼ばれたジャカード織機で織られたバスタオルを海外へ輸出する担当者として事務的な作業もこなした。

なんでも分解して組み立てる、手先の器用な少年時代

阿部氏は、1956年4月に大西町立大井小学校に入学した。勉強は嫌いだったが、手先が器用で「ネジを緩めたり締めたりするのが好き」で、周りにあった物、たとえば自転車を分解しては組み立てるといふ遊びをしていた。手先が器用と言っても例外があった。家

庭科の裁縫の時間に初めて学んだ糸結びである。その理由は、「こんな女の子っぽいことは嫌だな」とおもったからであるが、のちに阿部氏は製織技術者として数え切れないほどの糸結びを経験することになる。

幼少の頃、父親の働く姿を直にみる機会はほとんどなかったが、父親がワイヤーを使って巧みに弓矢をつくってくれたり、そのほかにも手作りの玩具をたくさん拵えてくれたりした。阿部氏の手先の器用さと創作好きは、父親譲りである。家は貧しいながらも、阿部氏は自然豊かな大西町でモノづくりの楽しさを学びながら元気よく育った。

大井小学校を卒業後、1962年4月に大井中学校に入学した。同校は、翌年の1963年4月に大西町立大井中学校（1947年4月開校）と大西町立小西中学校（1947年4月開校）が統合し、大西町立大西中学校（2005年今治市立大西中学校）となり、阿部氏は大井中学校の最後の入学生となった。当時、大井中学校では8クラス331名、小西中学校では6クラス250名の学生が在籍しており、統合によって600名近い規模の中学校が誕生した（大西中学校創立50周年記念事業実行委員会編『今治市立大西中学校 創立50周年記念誌』原印刷、2012年、35頁）。変わらず学校の勉強はあまり好きではなかったが、所属したバスケット部をはじめ学校での活動には真面目にとり組んだ。そして、1965年3月に新生の大西中学校の第2期生として卒業したのち、父親がタオルの技術者であったことやモノづくりに興味があったこともあり、専門的にタオルの技術を学べる学校への進学を決めた。



中学時代の阿部氏

（出典：大西中学校創立50周年記念事業実行委員会編『今治市立大西中学校 創立50周年記念誌』2012年、原印刷）。

1965年4月、阿部氏は愛媛県立今治工業高等学校紡織科に入学し、将来を見据えてタオルづくりに必要な知識を修得した。高校では写真部とタオル文化部に所属し、とくに写真部の活動をとおして写真機と写真撮影にのめり込んでいった。この頃から家族写真や風景写真など阿部家のアルバムに残っている写真のほぼすべては、阿部氏によって撮られたものである。写真撮影の延長でビデオの撮影にも興味をもつようになり、ビデオを片手に被写体探しに明け暮れた時期もあった。

タオル文化部は、紡織科で習う知識や技術をベースにしなが
ら、学生たちがタオル工場さながらのタオルづくりに挑戦する場であった。顧問が7つ年上の若い女性の先生で、穏やかな雰囲気の中
で多くのことを先生から教わった。



高校時代の阿部氏


近い将来、運転免許は必要だろうと考え、高校2年の夏休みに17歳で軽四自動車の免許を取得し、高校3年の冬休みに18歳で普通自動車の免許も取得した。

高校時代は授業や部活動の合間も忙しい毎日であったが、一度も授業を休むことなく皆勤賞をもらった。高校時代を満喫した阿部氏は、1968年3月に同校紡織科を卒業し、卒業後すぐにアマチュア無線の資格も手に入れ、写真やビデオ以外に趣味の幅を広げていった。

機械いじりの好きな少年は、現在のような携帯電話やスマートフォンがない時代に、無線を通じて人と繋がっているのが面白く、またその構造原理を学ぶのが爽快だった。アマチュア無線はいまでも阿部氏の心踊る趣味のひとつである。

2. 株式会社阿部春工場について

高校卒業後、小さなタオル工場を切り盛り

阿部氏は、高校卒業後すぐに父親の春男氏が1968年5月に創業した阿部春タオル工場に入社した。大西町にある自宅のまえの細い道を挟んだ土地に工場を建て、中古の整経機1台と（株）矢原織機製作所製  85インチのシャトル織機4台を据え、宮崎タオルの下請けとして輸出用のバスタオルやタオルケット、ジャカプリなどを製造した。


当時は^{かせいと}総糸の時代であり、「総糸からチーズにするんですが、昔のものは長さが短いし、^{ちぎ}干切り（経糸を巻いておく部分）の直径も22インチや24インチくらいやけん、30玉くらいしか巻けなんだけんね」と阿部氏が言うように、いまに比べると準備工程にたいそう手間がかかった。そして、阿部春タオル工場では、晒し染めの加工はできないため産地の中央繊維（株）に依頼していた。





現在の工場の様子

タオル工場の創設は父親が阿部氏の高校卒業のタイミングを狙って計画されたものであるが、そのとき阿部氏の小さな貢献について、つぎのようなエピソードがある。自宅の前に細い道があり、最終的にはその道を挟んでタオル工場が建てられたが、その区域が農地で元々宅地用土地でなかったため、すんなりと工場建設には至らなかった。父親は、書類を揃えて足繁く役所に足を運んだが、なかなか許可が下りない。そこで、書類にくわえて工場建設予定地の写真を用意しようと考え、当時高校生だった阿部氏に写真撮影を依頼した。高校の写真部で腕を磨いてきただけあって、阿部氏は得意に建設予定地を含め土地周辺の写真を撮影した。父親は、その写真を携えてすぐさま役所に提出したところ、今度は容易に工場建設の許可が下りた。工場建設に際して、阿部氏も一役買ったというエピソードである。

シャトル織機 4 台からスタート

表 1 を参照しながら、阿部春タオル工場（のち、株式会社阿部春工場）の歴史をみてみよう。1960年代はタオルケットをはじめ大判タオルの売れ行きが好調であり、阿部春タオル工場では今治ルーム  が製作した、通称「今治式シャトル織機」2台を1970年に増設した。しかし、1972年に落雷により工場が半焼してしまう。鎮火後、阿部氏は、さっそくシャトル織機の状況を確認し、損傷を受けた部分を取り除いて復元し、6台とも見事に再稼働させた。1974年には織機の部品を供給していた米谷商事（株）から2台のシャトル織機を譲り受け、計8台とした。1976年には創業時に中古で購入した旧式の整経機を処分し、代わりに新しく（株）奥井鉄工所製の整経機を設置した。

1980年代から1990年代前半にかけ、阿部春タオル工場では徐々に旧式のシャトル織機を処分し、タオルケットを効率良く製織できるトヨタエイトの導入を図った。


1980年、父親の春男氏が阿部春タオル工場とは別に設立した丸高タオル（株）が所有していたシャトル織機2台を譲り受け、計10台に拡張した。つづいて1982年に旧式の織機2台を処分し、今治のタオルメーカーであった田中織布（株）からトヨタエイト2台を買い受け、それらを広幅の「トヨタ95A」に変更して横織り製織による枚数の増加を実現した。1985年には矢原織機製作所製のレピア式革新織機を2台導入し計12台体制とし、この時




メカ好きな阿部氏が2台目に購入した

マツダのルーチェと阿部氏

点でもおもに大判のタオルケットを生産した。

さらに、無地タオルの製造で生産性を上げるために、1990年に旧式の織機を4台処分し、今治のタオルメーカーであった唐子タオル（株）からトヨタエイト4台を買いとり、1993年にも旧式

の織機4台を処分して、おなじく今治のタオルメーカーであった阿部工業（株）からトヨタエイト4台を譲り受けた。

1991年、阿部春タオル工場の将来を考えて「タオル」を社名から外し、阿部春工場に改称した。タオル以外の織物も製造できることを伝え、また社名が短い方が覚えやすいという理由からである。

1990年代に入ってタオル工業全体の生産量が減少し、代わって輸入タオルが勢いを増してくると、今治でもその影響は少しずつ表れはじめた。

表 1 株式会社阿部春工場沿革

年月	内容
1968年	5月、阿部春タオル工場創業、阿部憲政氏工場長に就任 中古の整経機1台、矢原式（矢原織機製作所）シャトル織機4台を設備
1970年	今治式（今治ルーム）シャトル織機2台追加
1972年	7月、落雷により工場を半焼 織機6台とも被害を受けたが、損傷した部分のみずから修理し再稼働させる
1974年	シャトル織機2台を追加し計8台となる
1976年	中古の整経機を処分し、奥井鉄工所製の整経機を新規に設置
1980年	丸高タオルのシャトル織機2台を譲り受け、計10台を設置
1982年	旧式の織機2台を処分し田中織布からトヨタイト2台（95Aに変更）を購入
1985年	矢原織機製作所製のレピア式革新織機2台を導入し計12台となる
1990年	旧式の織機4台を処分し唐子タオルからトヨタイト4台を購入
1991年	阿部春タオル工場から阿部春工場へ名称変更
1993年	旧式の織機4台を処分し阿部工業からトヨタイト4台を購入
1996年	主要取引先のミタカラが倒産し1,500万円の負債を抱える
1997年	北島物産が倒産し200万円の損失を出す
1998年	トヨタイト4台を処分し岩間織機製作所製レピア式革新織機2台を導入、計10台で稼働
1999年	3月、父親の死去により翌日より阿部憲政氏が阿部春工場代表となる
2001年	トヨタイト2台を処分し岩間織機製作所製レピア式革新織機1台を導入、計9台（トヨタイト4台、革新織機5台）で稼働
2009年	8月、落雷により工場全焼、織機9台とも損傷を受け処分 10月、稲岡工業より最新式の岩間織機製作所製レピア式革新織機（電子ジャカード式）6台を購入、工場も新しく建て替え翌年の2010年5月より稼働
2011年	田中産業より岩間織機製作所製レピア式革新織機2台を購入し計8台体制となる
2014年	5月、阿部春工場を法人化し（株）阿部春工場となる
2024年	1月、津田駒工業製のエアジェット式革新織機1台を購入し計9台体制となる

出典：阿部憲政氏提供資料より作成。

1996年に阿部春工場の主要取引先であったタオルメーカーのミタカラ（株）が倒産し、阿部春工場は1,500万円の負債を抱えた。翌年の1997年には大阪のタオル専門問屋でミタカラの下請けをしていた北島物産（株）が倒産し、ふたたび200万円の損失を出し

た。それでも阿部春工場は攻めの姿勢を崩さず、1998年にトヨタエイト4台を処分し、タオルメーカーの藤富から（株）岩間織機製作所製のレピア式革新織機2台を買いとり、計10台の織機体制を整えた。

トヨタエイトは横織りでタオルケット生産には効率が良かったが、1990年代後半頃より、阿部春工場ではタオルケットよりもフェイスタオルやバスタオルなどに力を入れるようになったため、トヨタエイトからレピア式革新織機に移行しつつあった。2001年、今治タオル全体の生産規模がさらに減少するなかで、阿部氏はトヨタエイト2台を処分して岩間織機製レピア式革新織機1台を導入した。この時点でトヨタエイト4台、レピア式革新織機5台の計9台となった。



父親の春男氏（左）、
母親のヨシコ氏（中央）、阿部憲政氏（右）

1999年3月23日、生涯現役でタオルをつくりつづけた父親の

春男氏が81歳でこの世を去る。阿部春工場でのタオルづくりは創業当初から阿部氏によって担われてきたが、同年3月24日から名実ともに阿部氏が二代目として工場を継承した。

（次号につづく）

